

# 俳句から

No.224 2020.12.1 岐阜県俳句作家協会

発行者 田中青志  
 〒509-6101 瑞浪市土岐町二九八の三  
 足立賢治方  
 岐阜県俳句作家協会  
 電話・FAX (0572) 66-1036  
 振替口座 00880-6-42302

## 令和二年 秋季総合俳句大会

### 講評より

「明確に伝える」

名和よちゑ

★釘ゆるむ父手作りの涼み台 仙石 信子  
 家族を愛し、家族に愛される父親像が見えて来る。これまでこの涼み台に座って話してきた毎日がかげがえのないものと懐かしく思い返している。長い年月を経て釘のゆるんだ涼み台を直す人はもういないのだろうか。家族の温かさ、手作りの温もりが伝わる一句となった。

★もの言ひにも言ひがつき草相撲 松浦なつ子  
 草相撲は祭礼などで行う素人相撲の事で秋の季語である。行事軍配の差し違ひにも言ひがつき、さらにも言ひがついた。うっちゃりか、すくい投げか白熱した取組で勝敗が付け難い。観客の野次も飛び交い草相撲が盛り上がりつづける様子が伝わってくる。

★かなかなや豆腐一丁買ふ小銭 日比野花枝  
 懐かしさを誘う句である。小鍋と小銭を手に豆腐屋まで行くと店の主が、大きな水槽から豆腐を掬い上げ、その濡れ手のまま、吊り下がった箆の中からお釣りをくれたものである。挨拶を交わし近所付き合いを大切にしていた。かなかなの声が一層心に沁みる。

「感動を強調して表現」 萩原 正三

★サングラスはずして髪をなやしけり 多和田瑠璃  
 サングラスをすると人相が変わって見える。優しい人でもサングラスをかけるのと怖い人に見える。赤ん坊に安心感を与えるため、サングラスを外し、自分の本心が表れる優しい眼を見せてあやしている。状況がよく判る句である。

★赤紙はかくも小さきや終戦日 村山 恭子  
 赤紙とは戦前の徴兵の召集令状で赤い紙に印刷してあったので、赤紙と言われた。赤紙が来ると拒否することが出来ず、赤紙を受けた本人はもとより家族の人生が大きく変わった。そんな重大な書面が「かくも小さい」と驚きを的確に表現している。

★豊作や父の野良着を高く干す 岡田 智彦  
 風水害や病氣もなく、五穀がよく実った。父は毎日田畑の手入れをして、豊作にこぎつけた。豊作の喜びは何ものにも代え難い。汗や土など汚れの付いた野良着は洗濯され、物干しに高く干された。「高く干す」に、喜びが共有されていて感動する。

「ものを通して詠む」 小森 広司

★もの言はぬ星のまたたき原爆忌 和田 八恵  
 昭和二十年八月六日に原子爆弾が投下された広島市と、九日に投下された長崎市の両日を原爆忌と言う。核廃絶を世界に訴え、毎年平和記念式典が開かれている。  
 掲句、「もの言はぬ星のまたたき」の擬人化に注目した。静かに地球を見守っている星。核廃絶が決まらない今こそ、その願いが叶うように星に強く思いを託しているのだ。

★新涼や赤子足裏で宙を蹴り 横山 正枝  
 異常気象の暑さも九月半ばを過ぎると、ようやく涼しさを感じるように。畳の上でママと遊ぶ赤子。ママのかけ声に足を蹴ったり、けらけらと笑ったりのご機嫌の一こま。孫のすくすく育つ家庭に至福の作者。

★炭坑節だけ輪に入る盆踊 林 弘  
 炭坑節は福岡県で生まれた民謡。全国に広く伝わり、今も盆踊りなどで親しまれている。

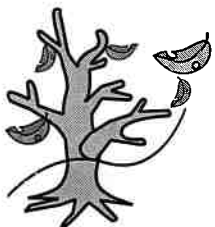
「炭坑節だけ輪に入る」の措辞から、作者は福岡県に関わりのある人か、昭和に育った一本気な性格が想像できる。心ゆくまで「炭坑節」を踊られたことだろう。

「秀逸な〈切れ〉」 今津 大天

★片恋や当てずっぽうに射る草矢 大滝 篤子  
 失恋をして「えい、ままよ」とやけっぽうになつた気持ちが良くあらわれている。しかし、そこは俳句。草矢を当てずっぽうに吹いたというから、諧謔味十分である。なお「や」の切字の使い方としても秀逸である。〈上五〉と〈中七下五〉は内容的に完全に独立していて、それが「や」によって結びつけられている。これが〈切れ〉字本来の用法である。

★駄菓子屋も本屋も鬼籍秋の声 大脇 和生  
 近くの商店街のお店の知り人が誰もいなくなつてしまった寂しさが「名詞」と「助詞」だけで述べられてしゃきつとした俳句になつた。この句の中七の〈切れ〉によって〈下五〉と〈上五中七〉がスパッと切れていて、音調も非常に良い。普通は一個くらい用言があるのがよいが、この句はそのような批判を許さない位名詞子である。

★心太すんなりと出る里言葉 宮脇 眞  
 この句の〈上五〉と〈中七下五〉も字義通りの関連性がなく、俳句の作りとして文句の付けようがない。この句も〈切れ〉の用法の見本と言えよう。なお、〈切れ〉の前後で内容的な独立性が必要と言ったが、一句の中で、その両方が〈切れ〉で結びついて一つの世界が現出しているというのが、〈切れ〉字の本来の働きである。



応募句入賞

岐阜県俳句作家協会賞

釘ゆるむ父手作りの涼み台 仙石 信子

片恋や当てずつぼうに射る草矢 大滝 篤子

サングラスはずして髪をあやしけり 多和田瑠璃

もの言はぬ星のまたたき原爆忌 和田 八恵

赤紙はかくも小さきや終戦日 村山 恭子

駄菓子屋も本屋も鬼籍秋の声 大脇 和生

新涼や赤子足裏で宙をけり 横山 正枝

心太すんなりと出る里言葉 宮脇 眞

炭坑節だけ輪に入る盆踊 林 弘

豊作や父の野良着を高く干す 岡田 智彦

もの言ひにも言ひがつき草相撲 松浦なつ子

かなかなや豆腐一丁買ふ小銭 日比野花枝

秀逸賞

旧姓の彫りある硯洗ひけり 伊藤みゆき

家毎に橋ある暮らし藻が咲けり 蒔田多佳子

大空を星に返して花火果つ 大橋庄一郎

百日紅咲くと言ふより燃えてゐる 町野眞佐子

山上の城を攻めぬる夏の雲 富田 好子

原爆忌干し物の影動かさざる 北浦 典子

サングラス奥に優しき眼かな 種田 昌史

佳作賞
信長忌真つ赤な絵の具絞りだす 山口 仲子
絹垣の神座遷すや虫の闇 広井 幹雄
こほろぎや深夜へつづく父の世話 各務 鎌三
笛の音や闇を貫く薪能 藤田 晃子
父の日の父をしのべば母のこと 高須 良子
魂の重さあるらし曼珠沙華 大杉すみゑ
呼び起こす一日寝そう帰省の子 藤井 美子
伝へたき日の丸弁当梅を干す 今井 みゑ

入選

下校児の列のくづれや赤とんぼ 伊佐治銘子
桜桃忌襲にあふるる雨の音 村瀬 幹枝
八月の木椅子ひやりと礼拝堂 はやし 碧
想ふこと思ひだすこと終戦忌 堀 逸郎
盆用意岐阜提灯も古りにけり 春日井勝代
星飛んでまたうやむやにしてしまふ 名和 永山

暑氣払ひ富山の葉売りが来て 西田 拓郎
間を置いて山の村での大花火 加藤 寿志
梅雨明けや牧にひびける牛の声 伊藤 しき
妃殿下の土星のやうな夏帽子 梅村 五月
叱られて絆は深く太くなり 御田村光枝
かなかなや児の諷ひの舌足らず 金子美和子
痛みほど晴れたる空や原爆忌 大岩 里子
ささやけば降りてきそうな星月夜 奥村ちづ江
干し竿に隙間なく乾す梅雨晴れ間 本山 忠夫
厨から夜中に氷でできる音 大橋久仁子
鎌なでてけふの稲刈終へにけり 小林 良治
遠すぎる銀河の人を想ひけり 清水登美子
露の世の今日一口を生ききりし 本多八重子
涼新た墨絵の軸に掛け替へて 東 紀子
飛び込んで男にならむ橋の上 宮代 一草
露草やこは捨田か休田か 岡 八重子
手をつなぎたき人のおて今朝の秋 鷺見 吉直
朴葉鮓母と作りし頃のこと 後藤まり子
水遣りのすみし鉢打つ大夕立 林 恵子
手の中に幸せひとつ初林檎 川瀬 裕子
県人会あつまる人の岐阜団扇 成瀬 貢
白薔薇の門の向こうに待ちし母 田口みゆき
海鼠壁蔵の町今秋落暉 小澤 藍加
遅しく株増えてをり青田風 竹内 宣雄
ただいまの娘の声に湧く梅雨籠 稲川 正幸
本を閉じ目薬さして虫の闇 吉田紀美子
朝顔や支柱求めて宙を舞う 説田 祐子
秋空に足蹴り上げて剛速球 榊原 宣宏
二番煎じのダーリンティー夏の果 黒田 佳代
地平より竜立ちのぼるはた神 杉本 悦子

奇贈誌紹介

鈴木ミヨコ



☆伊吹／一六九号

☆貝寄席／六／九月号

☆かがんぼ／二・四月号

☆岐陽／三／七月号

☆自在／四・六・八月号

☆獅子吼／六／十月号

☆梅檀／六／十月号

☆草踏めば殊に蓬の匂ひ立ち

☆灼け地を少しく浮きて葛

☆片かな 宮本 光野

☆辻 恵美子

☆古川 昭子

炎屋に出て若者に叱らるる  
 帰れぬ子へ絵手紙を書く遠花火  
 リュックまた背負ひ直して登山口  
 大学の窓に残る灯木葉木菟  
 刃物研ぐ鉄の匂ひや秋夕べ  
 もう一度会ひたき人よ天の川  
 旅靴しまひしままや秋の風  
 鰻の日こだはる夫の炭火焼  
 夜店果て消毒液で古仏拭き  
 銀河鉄道めくよ月夜の広見線  
 杭を打つ音の響きや炎天下  
 紫陽花や水を注いで老いの午後  
 夏帽子軽き別れと思いに  
 蔓引くや解決の糸たぐり寄せ  
 長雨のTシャツ張りのなき乾き  
 梅雨の間や手遊び歌に声わむ  
 寺参り墨絵の団扇もちらひ来し  
 新涼や手足の円き赤子かな  
 ひとしきり闇を引き寄す虫の声  
 道の駅鈴虫選りて買はれゆく  
 かけ抜けた素足にのこる鼻緒跡  
 秋めくや本の世界へ小旅行  
 晩夏光蕙鈍色蟹葉師  
 川筋の行く手を阻む花芒  
 決壊の引戸に残る出水跡  
 朝顔やこの世の色に咲く夜明け  
 父の夢入る鮎色の籠枕  
 橋下も人の行き交ひ床料理  
 流されてもがいてもどる水馬  
 日盛りや少し長目の昼休み  
 返納地草刈る音の休みなく  
 耳遠き夫に窓開け虫時雨  
 金魚飼ふ独居の余白埋めてをり  
 出水とはやさし過ぎる語橋流る  
 つつとつと来て鶺鴒の拭ふ嘴  
 猫じゃらしふりふり歩く下校の子  
 二つ三つ心残りや木守柿  
 昆虫にやうやくさはれ夏果てる

山田 文代  
 下垣内町子  
 伊藤きよ子  
 堀口千恵子  
 清水 勝子  
 衣斐佐和子  
 柴田 節子  
 長谷川良子  
 大野 正子  
 小栗眞理子  
 大塚たか子  
 尾藤 聡代  
 木野 和子  
 山中 麦子  
 三輪 幸恵  
 川上 圭榮  
 堀 朋子  
 佐合あさ子  
 保浦小枝子  
 千藤 恵三  
 関 寿江  
 高崎 和子  
 渡辺 竹霜  
 水口 諄子  
 中野 等  
 小里 幸剛  
 滝田 朝江  
 大蔵栄美子  
 星野小枝子  
 奥田貴美子  
 奥谷 妙子  
 西川寿嘉子  
 小野 章子  
 清水須磨子  
 渡会亜矢女  
 井口 尚子  
 今寺 久枝  
 岩田 千

各選者特選句 (五十音順)

今津 大天 選  
 片恋や当てずつぼうに射る草矢 大滝 篤子  
 こほろぎや深夜へつづく父の世話 各務 鎌三  
 駄菓子屋も本屋も鬼籍秋の声 大脇 和生  
 宇佐見俊一 選  
 片恋や当てずつぼうに射る草矢 大滝 篤子  
 恋蛸闇の深さをまだ知らず 村瀬 茂子  
 新涼や赤子足裏で宙をけり 横山 正枝  
 大野 鶴士 選  
 もの言はぬ星のまたたき原爆忌 和田 八恵  
 一山の塊となる蟬しぐれ 北野 武司  
 萩原 正三 選  
 電柱の影にも寄りて片かけり 可児 靖子  
 父の日の父をしのべば母のこと 高須 良子  
 豊作や父の野良着を高く干す 岡田 智彦  
 日下部宵三 選  
 山上の城を攻めぬる夏の雲 富田 好子  
 夏終る老老介護恙無く 園部 佳成  
 サングラス奥に優しき眼かな 種田 昌史  
 小森 広司 選  
 炭坑節だけ輪に入る盆踊 林 弘  
 風鈴を聞きぬる二人寺のカフェ 棚橋 良子  
 えさ箱をつけてゆづられ目高の子 小栗千賀子  
 佐々木蓬子 選  
 木道の果て秋雲へとどきけり 時田多佳子  
 大空を星に返して花火果つ 大橋庄一郎  
 袖に嫁しここがふる里門火焚く 西田 栄代  
 清水 青風 選  
 サングラスはずして嬰をあやしけり 多和田瑠璃  
 君の目に芒原あり私あり 大杉すみ糸  
 心太すんなりと出る里言葉 宮脇 眞  
 住 斗南子 選  
 家毎に橋ある暮らし藻が咲けり 時田多佳子  
 笛の音や闇を貫く薪能 藤田 晃子  
 駄菓子屋も本屋も鬼籍秋の声 大脇 和生

田中 青志 選

精一杯生きたる蟬の転がれり 種田 昌史  
 赤紙はかくも小さきや終戦日 村山 恭子  
 崩れると見えて噴水立ち直る 細川 敦子  
 名和よちゑ 選  
 釘ゆるむ父手作りの涼み台 仙石 信子  
 かなかなや豆腐一丁買ふ小銭 日比野花枝  
 新刊の書店の棚や秋初め 渡辺 道子  
 橋場 きよ 選  
 絹垣の神座遷すや虫の闇 広井 幹雄  
 隣り合ふ人とわかちし団扇風 梅田ふみえ  
 赤煉瓦に明治の鼓動糸取女 片山 春代  
 水口 武彦 選  
 原爆忌干し物の影動かさざる 北浦 典子  
 呼び起こす一日寝そう帰省の子 藤井 美子  
 伝へたき日の丸弁当梅を干す 今井 み糸  
 岬 雪天 選  
 釘ゆるむ父手作りの涼み台 仙石 信子  
 サングラスはずして嬰をあやしけり 多和田瑠璃  
 もの言ひにも言ひがつき草相撲 松浦なつ子

「岐阜俳句の未来」 田中 青志

今年の「岐阜俳句」の七句と百字エッセイに  
 次のような文章がありました。  
 「私の本棚には、十四冊の『岐阜俳句』がある。  
 悲しみを託した百四十句、夢としての句集に比  
 する思いすらある。この貴重な十四冊の歴史を  
 大切にしたい。」  
 岐阜県人として歴史ある「岐阜俳句」を育て  
 盛んにしたいと願いつつ、それなりの働きをし  
 てきた協会会長としての二年間、こんなことを  
 書いてくれる人があって嬉しく思いました。そ  
 して、こんな心の人たちがいてくれる限り「岐  
 阜俳句」は永遠に不滅だと、改めて意を強くし  
 ました。  
 巷に俳句界の高齢化が言われ、このように考  
 えてくれる人たちの減少の影響かもしれませ  
 んが、従来は六百名を優に越えた参加者が、今

☆つちくれ／五／八月号

焦げ臭くなるほど麦田広  
 がれり 今津 大天  
 新緑や老いて新たな暮し  
 方 村井 田鶴  
 ☆天衣／六・八月号  
 退路なき葉先にゆれて蝸  
 牛 足立 賢治  
 香水をつけず誰にも好か  
 れけり 岬 雪天  
 ☆菜の花／六／十月号  
 村中が縁続きなり葛の花  
 伊藤 政美  
 噴水の高き明日のある高  
 さ 田中 青志  
 ☆日輪／七／十一月号  
 低き軒寄せ合ふ宿場夏つ  
 ばめ 加藤 忠美  
 田植機の釘打つごとく苗  
 を植ゑ 和田 八恵  
 ☆濃美／六／九月号  
 お風入れ武具甲冑の赤を  
 どし 渡辺 純枝  
 薫風や教会の鐘ひとつ鳴  
 る 船戸 成郎  
 ☆羽衣／二／九月号  
 狂ひなき形見の時計秋思  
 ただ 透 乙美  
 高原の起伏に添うて蕎麦  
 の花 水谷八重子  
 ☆飛騨／三三六／三三九号  
 夕虹や又裏返す砂時計  
 小鳥 幸男  
 麦秋や家ごとにある土の  
 橋 住 斗南子



年は三百二十五名(昨年は三百三十九名)に留まる実情になっています。

今、岐阜県俳句作家協会の役員名簿には理事選者、幹事など七十余名の名があります。これらの方々は、岐阜県内の俳句結社やグループに影響力のある人だと思えます。

これらの人たちが先頭に「岐阜俳句」の伝統歴史を守るべき努力が更に得られれば前途は大いに有望だと思えます。

世はペーパーレス化の流れ、「岐阜俳句」のあり方も近い将来、方向転換の時代を迎えることになるかも知れませんが、その前提の基礎としても先人の伝統と歴史を守るの精神は不変です。そして、そんな未来に対して順応できる体制を維持するためには、会員諸氏の熱意と啓発を続け協力の絆を深くしていくことが必要であると考えます。

吟行地案内

「郡上本染・寒ざらし」

透 乙美

今年新型コロナウイルスの拡散禍により、吟行が難しくなった。辛うじて出掛けることができた「郡上本染・寒ざらし」の紹介をする。

郡上本染のこいのぼりの寒ざらしは、一月二十日と二月上旬の二回行われる。二月の日時は、地元の小学生在が体験学習として参加するため、学校と相談の上で決定することである。場所は日本名水百選に指定されている「宗祇水」の近く、吉田川と小駄良川の合流点付近である。現場の小駄良川には、布に染めあげられた色鮮やかなこいのぼり十五・六枚が清流に放たれる。

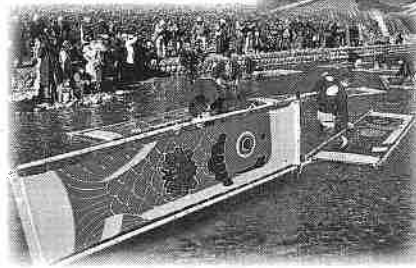
「こいのぼりの寒ざらし」とは、郡上本染のこいのぼりの色を染めない輪郭部分に置いた糊を、流水で洗い落とす作業である。郡上本染は、郡上市八幡町の渡辺染物店に四百年以上続く伝統工芸である。同店の職人と郡上本染後援会

員ら十名ほどが川に入り、お玉や刷毛を使い線にそって糊を落としていくと目や鱗の輪郭が鮮明に浮かび上がる。



歳時記には「寒晒」とは「寒中に白玉粉などを製すること」とある。「郡上本染のこいのぼりの寒ざらし」は、郡上八幡の冬の風物詩であるが、そのまま季語として

用いることは無理かも知れない。しかし、本染のこいのぼりの糊を寒中の清流で洗い落とす工程を、なんとか句に残したいものである。



〈アクセス〉

\*バス 岐阜バス高速八幡線 岐阜〜郡上八幡

\*車 東海北陸自動車道 郡上八幡ICより五分

〈問合せ先〉

\*郡上八幡観光協会 Tel.〇五七五(六七)〇〇〇二

\*渡辺染物店 Tel.〇五七五(六七)三九五九

「吟行の手段あれこれ」

今津 大天

吟行の手段は、大まかに分けると四種類、(一)徒歩、(二)公共交通(十徒歩)、(三)車(十徒歩)、(四)自転車(十徒歩)である。

吟行の経験のある人なら、俳句作りにもっともよいのが、徒歩だということには異論がないと思う。しかし、徒歩は他の交通手段と併用しないと行動範囲が狭いから、ほとんどの人は、上述の(二)と(三)を利用してのだろうと思う。私は数年前から自転車ツーリングをするようになった。そこで、自然にツーリングと俳句が結びついた。自転車の良いところは、車の進入出来ない道の走行や一万通行の逆行が可能な場合があることもあるが、何と言っても最大の利点は、何時でも何処でも停車して、すぐ俳句の徒歩モードに変更できることである。

もし、車に自転車積めるなら、車の利点と自転車の利点の両方を享受できる。車だけの場合は行動の密度が異なるといえる。遠くに出かけても、隣村と同じような感覚で回ることが出来る。もし、電車で自転車を持ち込めば、もっと行動範囲が増える。

私は四国遍路に出掛けた時、車を徳島や丸亀に預けて、そこから自転車回った。しかし、全行程を一度で回ることが出来なかつた時には、車の置いてあるところまで輪行して電車で戻った。フェリーを利用すれば島にも行ける。私はここで自転車吟行を決して積極的に、或いは無条件に勧めている訳ではない。

自転車走行は他の場合よりリスクが高い。車の運転以上に注意を払うことも必要である。交通規則を守ることはもちろんだが、それ以外にも、狭い道や歩道も走ることもあるから周囲に十分注意して走行することが大切である。もし事故を起こせば、小さな事故でも怪我をする。

自転車の利点は、自分の体力精神力の範囲内の運動が可能であることである。遍路で参拝も含めて一日十五時間近く走ったことがあるが、さすがにそれはやり過ぎだった。何事も身の丈の少し上を行くのがよいだろうと思う。



事務局より

各地で句会が再開されつつあります。新型コロナウイルス対策として、検温、消毒の徹底、密にならないよう会場設定の工夫をするなど様々な対策が取られています。句会でも参加した方々からも「やっぱり句会はええねえ」との声。

本会も、秋季総会俳句大会開催に向けて準備を進めてまいりましたが、最終的に断念しました。ご高齢の会員が多く、ご家族に心配をかけたくないとの思いもありました。賞状、賞品入選作品集等は、春季大会同様すべて郵送させていただきますました。

来年度の春季大会は四月を予定しておりますが、何とか開催したいものです。それまでの間、会員の皆様の一層のご自愛、ご健吟をお祈り申し上げます。一年間、ご支援、ご協力をたまりありがとうございます。

編集後記

コロナ禍で、「岐阜俳句」も「会報」も全てオンライン・リモートで行いました。会報誌面も昨年までとは異なります。それでも、スムーズに出版に漕ぎ着けられましたのは、会員諸氏の協力と編集部の努力に加え、先人の築いた礎があったからだと感謝の思いを強く持っています。今後も伝統を守って行けたらと念願している次第です。